

函館ワンニャン物語 ② ～ラブ～

◆館岡家居間（三ヶ月後）

大型犬の鼻っ柱に猫パンチを食らわす黒い猫。
それを見ていた聖子が叫ぶ。

聖子「こら、ダメ、ポン太、やめなさい。」

叱られたポン太は、その場からいなくなる。
猫パンチを食らっても、黙って耐えている大型犬の
ラブを見つめ、話しかける。

聖子「ラブは、いい子だね。黙ってがまんして。ポン太
のこと、絶対かじったらダメだからね」

ラブをなでながら、ラブを保護した松前町のことを
回想する。

◆松前町原口（平成十三年）

教頭に昇任した洋一は、単身で松前町原口に赴任す
る。

初めて家族と離れて生活する洋一は不安でいっぱい
であった。

仕事も教頭職になり、何かと忙しい日々を送る。
また同時に大学進学を決めた長女は、札幌での生活
をスタートさせる。

洋一にとって、週末に遊びに来る家族と共に散策す
る松前や江差が息抜きのひと時であった。

そんなある日の放課後、学校で仕事をしている洋一
のもとに、数人の子供たちがやってくる。

子供「教頭先生、大変だよ。大きな犬が築港にいるの。
野良犬みたい。」

洋一「へえ、そうなんだ。かじられると大変だから、近づいたらだめだよ。」

子供「でも、おとなしいよ。頭なでたもの。」

洋一「そうか。でも、気をつけてね。」

子供「わかった。じゃね。」

子供たちが立ち去る。職員室で先生方と雑談する。

洋一「捨て犬かな。もしかしたら迷い犬、こんなところにいるなんて・・・。」

教師「教頭先生、意外と捨て犬は多いんですよ。函館からわざわざここまで来て捨てていくやつがいるんですよ。こんな遠くに捨てられたら、どんなに賢い犬でも家に戻ることはできないでしょう。ひどい話ですよ。まったく。」

洋一「そうなんですか。」

寂しそうにうつむく。

◆学校（捨て犬事件があった一週間後）

朝の職員室。慌てて子供たちが入ってくる。

子供「教頭先生、大変、大変！助けてあげて。お願いだから、助けてあげて！」

洋一「どうしたの。みんな落ち着きなさい。」

子供「あの犬、保健所に連れていくって。連れていかれ

たら、殺されちゃう。教頭先生助けてあげて。」

洋一「誰がそう言ったの？」

子供「お母さん！近所の人たちと相談して、保健所にやるって決めたの。」

洋一「わかった。先生、がんばってみるから、みんなは教室に戻りなさい。」

子供たちを教室に戻した後で、地域の人に連絡をする。

どうやら、保健所に連絡を入れ、処分してもらいたい。

しばらく考えた末に、校長に相談。

子供たちへの教育的配慮からも、犬の命を助けたい旨を伝える。

教頭住宅でその犬を飼うことの許可を得て、放課後犬を保護するために築港に向かう。

◆原口築港（夕方）

築港で子供たちと一緒に犬を探し回る洋一。

倉庫の陰から出てきた大型犬を発見。

子供「教頭先生、これ何という犬？」

洋一「ラブラドルだよ。盲導犬とかになる頭のいい犬なんだよ。きっと、誰かに捨てられちゃったんだね。」

子供「教頭先生、大丈夫？この犬飼えるの、本当に助けてあげられるの。」

洋一「大丈夫だよ。教頭先生、この犬責任を持って飼う

から、安心して。大丈夫！」

子供「教頭先生、がんばってね。ありがとう教頭先生。
この犬の名前ね、ラブラドルだからラブってど
うかな？」

洋一「ラブラドルのラブ、いい名前だね。よーし、そ
うしよう。ラブにしよう。」

その夜、聖子に電話をする。
犬を飼うことになった経緯を説明し、また犬が増え
てしまうことを、どうにか納得してもらう。
(函館の自宅には、すでに四頭の犬がいるため、
聖子はこれ以上、できれば飼いたくなかった。
その事情は、洋一も十分承知していた。)

◆湯川の海岸（平成十四年春）

休日の朝、犬の散歩をする洋一と聖子。
洋一がラブを連れ、聖子が食太（くうた・何でもよ
く食べるからこの名が付いた）を連れている。
食太は飼われている犬の中でも、一番最初から飼わ
れている気性の荒い中型犬である。
ちょっとした拍子に、聖子が食太のリードを離して
しまう。
次の瞬間、突然後ろから走ってきた食太がラブに襲
いかかる。
喧嘩する二匹を引き離そうとする洋一。
そこに、聖子が走り寄り転ぶ。
驚いたラブは、聖子の顔面に噛みつく。

聖子「きゃあー」

顔面からかなりの出血。
洋一が駆け寄り顔面を見る。

洋一「大丈夫か」

聖子は無言でうなづく。

洋一「とにかく救急車だ。救急車を呼んでくるからここで待ってろ。」

急いで自宅に戻り救急車を呼ぶ。
間もなく救急車が到着。
洋一は救急車に同乗し、病院に向かう。

◆函館C病院（病室）

手術が終わり、ベッドで寝ている聖子。
やがて目が覚め、洋一が横にいるのに気づく。
顔の半分が包帯で覆われている聖子を心配そうに見ながら、洋一が話しかける。

洋一「大丈夫か。」

聖子は軽くうなづく。
その様子を黙って見つめながら洋一がおもむろに口を開く。

洋一「あの犬・・・、ラブ・・・。連れていく、明日にでも保健所に。」

聖子は、かすかに首を振る。
そして静かに話し出す。

聖子「それだけは、しないで。保健所には、やらないで・・・、お願いだから。」

洋一「でも、お前のこと齧ったんだぞ。しかも顔を

……。お医者さん、鼻骨骨折と涙腺断絶って
言ってた……。仕方ないよ。保健所に連れて
行くしかないよ。」

聖子「絶対ダメ。許さない。喧嘩しているラブと食太
の間に入った私が悪いんだから。保健所には絶対
連れていかせない。」

その様子を見つめながら洋一は、今まで保護してき
た犬たちのことを思い出す。

函館の農村地区、亀尾で小さな段ボール箱に入れら
れ捨てられていた食太のこと。

小さかった頃は、よく自転車のかごに入れて散歩し
たこと。

真夏の暑い日、丸二日間、砂浜につながればなし
で捨てられていた小型犬、ウル（保護した時に、目
がウルウルしていたので）のこと。

保健所で処分寸前を助け出したシベリアンハスキー
のゴン太（フィラリアに感染していて捨てられた）
と、声帯を取られ吠えることができないようにされ
捨てられた大型犬クロのこと。

そして、原口の築港を一週間もさ迷い続けていた
ラブのこと。

洋一は、静かにうなずき口を開く。

洋一「わかった。」

聖子「ありがとう。」

洋一「顔を齧られて、ありがとうか。こちらこそ、あり
がとだよ。ありがとう。」

聖子が、かすかに笑う。

(「函館ワンニャン物語 ③」へ続く…)